不登校新聞

コキ・ト・ロッシー

第一章　出会い

初めまして。僕は谷田邦春。『不登校新聞』の記者です。新聞と言っても、ごくごく小さな月刊紙で当然のことながら収入はほとんどありません。それなのに、これを本業だと言えるのは、不登校の取材を通して心の縛りを解くことができたからです。人との出会いが僕の心を自由にしてくれた、これが報酬です。

僕が不登校新聞の記者になったのは二十六歳のとき。冬眠のような長い引きこもりを経て、夜になると出歩いていた頃です。

ある日、ギイッ、ギイッと鳴く鳥の声に貴重な眠りを破られてしまいました。閉め切った雨戸の隙間から射す陽光は柔らかく、まだ朝が早いことを教えています。もう一度眠ろうと頭から布団を被りましたが、鳥の声が耳障りで、どうしても寝付けません。イラついて水を飲みにキッチンに立ち、蛇口に口をつけた途端、

あ……

ふいに鳥の名前を思い出しました。

『ほら、今、鳴いたのがムクドリ。尾の長いのがヒヨドリだよ…』

父は庭にやって来る野鳥を小学生の頃、よく教えてくれました。

カーテンを引くと、眩しい光が飛び込み庭のグミの木からムクドリが飛び去りました。白い残像を宙に残して。紙よりも薄っぺらで目も鼻も口もない。自分自身のようでぞっとしました。

コトリ、と玄関で音がしました。母が新聞を取りに出たようです。僕は薄く開いたドアから紙切れのようにスルリと外に出て、母の脇を無言ですり抜けました。数年振りに出る明るい戸外でした。心臓がトクトクと音をたてました。通りの角を曲がるとき、新聞を胸に祈るように立っている母の姿が目の端に映りました。

新聞配達の少年が自転車に乗ったままで、家々のポストに軽々と新聞を差し込んでいきます。首にタオルを巻いて腕を振って、年配の女の人が僕を追い越して行きました。

歩くくらいで、なんで、あんなに元気を出すんだろ……

つっかけたサンダルがズリズリと辺りに響きました。大通りに出たのに人も車も少なくて、ようやく今日が休日らしいことに気付きました。朝日を浴びて楠並木がザンザンと輝き、フェンスに吊るした鉢植えから青い小さな花がこぼれています。清々しい空気の中を歩いていると頭の中がからっぽになっていくようでした。

『歩くとね、心も体も丈夫になるのよ』

おばあちゃんが言ってたっけ……

そうやって、ただ歩き続けているうち、いつの間にか人の流れに紛れて街外れの広場に辿り着いていました。木々の間に三角の旗が万国旗のように張り巡らされ、入口にピンクの花紙で飾られた『市民文化祭』の立て看板がありました。人々は会場の建物へと入って行きます。センダンの木の下にテントを張ってフリーマーケットが出ていました。幼い子がしゃがんでビニールシートに並べられた絵本をながめています。傍らを行き過ぎようとする僕の正面をふさいでチラシを差し出す人がいました。仕方なく受取ると、それは不登校の子を持つ『親の会』のものでした。

不登校に関しては、たまにテレビで見聞きしはしても無関心に流していました。それが自分自身を守る行為でもあったからです。が、その時ふいに不登校の文字が閉じかけた傷を開けてしまったように思いました。無気力だった高校生活の虚しい時間に引き戻されるようだったからです。

ぼんやり佇んでいる僕に、フリーマーケットのテントの中で、さざなみのようなお喋りをしていたお母さんたちが、ティーカップをかざして手招きをしました。手にしたチラシをテーブルに伏せて、無愛想にパイプ椅子に腰を下ろしました。白いブラウスのお母さんが紅茶とクッキーをすすめてくれました。僕は黙って紅茶を口に含みました。おいしかった。微かな酸味……芳ばしい胡麻のクッキー……賑わう人々の向こうにコスモスが揺れていたのを覚えています。心にまとっている頑なコートをふっと脱いでしまいそうで、慌ててそこを立ち去りました。直ぐに自販機でコーラを買って飲んだのは、あのテントの中の柔かな空気をコーラの刺激で洗い流そうとしたのかもしれません。そんな風にゆがんだ僕だったのです。

でも、穏やかな気持ちは家に帰ってからもそのままでした。不機嫌な顔を作っているのに、母は僕の変化を敏感に感じ取ったのでしょう、

「ハルくん、夕飯はハンバーグにしようか？」

と声をかけてきました。

「うん」

僕は素直に頷いていました。こんな、ごく普通の会話が数年振りのことだと一体誰が思うで

しょうか。帰宅した父がリビングで食事をしている僕を見て、驚いた表情をしました。
「おかえりなさい」
僕は思い切って口にしました。
「ただいま……」
父は幼い子どものように、たどたどしい口調で言いました。母の目にみるみる涙が溢れました。僕はこのとき初めて親のつらさに気づいたのです。
休日も仕事なんだな……
ネクタイを緩めて食卓についた父を見て思いました。僕たちは静かに食事をし、同じテレビ番組を見て、ちょっと笑いました。それから父のあとにお風呂に入り、母が大急ぎで作ってくれた杏仁豆腐を三人で食べました。
子どもの頃、お風呂あがりに食べるのが楽しみで作ってないと機嫌が悪かった……幸せだった頃の景色を母はいつも想っていたのでしょうか。
「おやすみなさい」
部屋に引き上げるとき自然に言うことができました。
「おやすみハル」
「おやすみなさい。ハルくん」
父と母が僕に言いました。何気ないこんなひとときがどれほど大切か、僕たち家族は知っていました。けれど、何だか落ち着きません。この穏やかさがどうにもしっくりこないのです。不安で不機嫌で投げやりでなかったら僕が僕ではないように感じるのです。こんなに心が穏やかでは眠れないに違いない、そう思うと不安になって少し落ち着きました。
何だか変でしょう?……
不安を抱くのが日常化していると、それが習慣になってしまい、習慣が性質になってしまうらしいのです。
僕はベッドに寝転んで広場で渡されたチラシを広げました。不登校の子どもを持つ親の気持ちが、びっしりと書き綴られていました。僕はときに憤り、ときに切なくなりながら一気に読みました。そして最後に書かれていたアドレスに思い切ってメールを送りました。過去の自分をさらけ出した瞬間でした。返信は直ぐに届きました。うれしかった。言葉が堰を切って溢れだし、洪水のように僕の想いを書き送りました。
本当は誰かと話したかった。焦がれていた……
自分の気持ちをようやく素直に認めることができて、心がぐんと軽くなりました。信じて

もらえないかもしれないけど心の重しって、実は重量があるんです。約四kg。それも心臓に乗っかっているんですから、苦しいはずです。根拠ですか？

その日、本当に久しぶりに風呂に入って体重計に乗ったんです。六十一kgでした。それから気持ちがからっぽになるまでメールを送りつづけて、そのあと測ったら、五十七kgに減っていました。

こうして、メールの交換から始まった交流は次第に発展し、いつの間にか僕はスタッフの一員になっていました。定例会に子ども連れで参加する人たちのための、保育コーナーが僕の担当です。

その頃、「親の会」の通信を新聞に格上げしようという話が持ち上がりました。広く社会の人に関心を持ってもらい、不登校の子どもたちを理解してもらいたい気持ちからでした。そして、取材担当を僕にということになったのです。

定例会が開かれるマンションは会員さんの所有で無償で提供されていました。会の事務局にもなっていましたから、水道光熱費等は会費から支払われていました。給料は出せない代わりに、ただで住んでも良い、住居にかかる費用は上限を決めて無料ということになったのです。これが僕の『不登校新聞』記者としての始まりです。

実は僕は不登校だった訳ではありません。不登校したくても出来なかった者なのです。それなのに不登校という言葉に反応する。その理由は僕の中学時代にあります。この時期を辿ることは、隠しておきたい事実をさらけ出してしまうことになるのですが、今、僕はそれをしようとしています。

第二章　卒業式

当時の僕は、ごく普通の中学生でした。他に表現のしようがないくらい普通の中に埋没していました。学校生活を生き延びるにはもっとも安定した位置にいたのです。当然、イジメがあり、不登校になる生徒もいました。暴言を吐く先生、生徒もいました。正義感のある生徒も優しい生徒も、又、生徒を理解しようと努める先生も、見て見ぬ振りをする先生もいました。そして、目立たずにイジメに加担する生徒もいました。

中学校とは、そういう生徒や先生が、勉強しなければ将来がないという風に思い込んで生きている場所です。僕は多分、たいていのことに鈍感でした。例えて言えば、心の中の泉を凍らせた状態です。僕は傷つかず、傷つけなかったと思います。けれど、心の中の凍った泉は鏡のように学校生活の全てを写していたのです。

二年生までの成績は中の中といったところでした。その意味でも目立たない生徒だったのです。クラブ活動は帰宅部と言われないために、規律のゆるいパソコン部、通称コンブに入っていました。父も母も勉強を強いるタイプではなく、進路は就職に有利な高校をと思っているようでした。僕も入れるところなら何処でもと、のん気に構えていました。そんな僕が一変する出来事が卒業式に起きたのです。

空が一段と青い日でした。式は校長先生の挨拶から始まって、お定まりの祝電披露、送辞と続きました。そして、事は答辞の直後に起こったのです。

答辞を述べるのは三―Aの斉道紗江さんでした。彼女は弁論の全国大会に出場する程、才能豊かな人です。あとで聞いた話ですが、学校は彼女の書いた答辞に、訂正を繰り返していたそうです。そういえば、体育館の隅で学年主任の先生が、紗江さんに指図しているのを目撃したことがあります。

気持ちが反映していない答辞を、それでも彼女は読み上げました。そして、静かに席に戻るはずでした。練習のときのように。ところが彼女は、

「卒業生代表、三年A組　斉道紗江」

と言い終えるやいなや、突然、壇上に駆け上がったのです。誰もがあっと、声にならない声をあげました。彼女は唇をかみしめ、仁王立ちなって顔を上げると、結わえていた髪をふりほどき、スカートを翻して、そのまま体育館を駆け抜けて行ったのです。あっけにとられている僕らの前に巻紙がふわふわと落ちました。妖怪一反木綿のように長々と……

先生たちはざわめく生徒たちを制して、何事もなかったかのようにしようと必死でした。怒気を帯びた苦々しい顔。血走ったあの目。みんなは顔を見合わせて『スゲー』とささやいたり笑ったりしました。呆然としている僕の脇腹を隣の奴が肘で突っつきました。誰もがみな、嬉しがっていました。心の底では騒動を期待している、自分のうっ憤を祭りのような騒ぎに仕立てたいと願っているのです。血の滲むような悔しさは彼女ひとりのもの、誰にも伝わりませんでした。

やがて、水面に広がった大きな輪が収縮するように、いつの間にか式は終わっていました。ところが、僕の興奮は一向に収まらず、恥ずかしいことには発熱までしてしまったのです。熱に浮

かされながら幾度となく彼女を夢に見ました。襟足でおとなしく結んでいた髪が、扇のよう広がったり、翻ったスカートから伸びた足が大理石のように光ったりしました。目が覚めると、彼女のかみしめた唇が浮かびました。たったひとりで戦った紗江さんを僕は好きで尊敬したのです。

彼女は県内きっての進学校に合格しました。卒業式の行動は受験した高校には知られずに済んだのでしょうか、彼女はどんな思いだったのでしょうか……

その日を境に僕は猛勉強を開始しました。塾にこそ行きませんでしたが、親せきの医大生のところへ彼が辟易するほど通って、頭が変になるほど勉強しました。あまりの変貌ぶりに両親は心配したり喜んだりしました。成績はさながらロッククライミングのように上昇していきます。僕はとても目立つ生徒になってしまったのです。先生は僕を引き合いに出して生徒たちに発破をかけました。そのために僕は嫌がらせを受けガリ勉と揶揄されました。反面、それまで口も聞いたことのなかった優等生に声を掛けられるようになり、彼らと行動を共にするようになりました。僕は紗江さんと同じ高校に行きたかったのです。

僕は合格しました。紗江さんと同じ高校に通える喜びで胸がいっぱいでした。同時に、中学校を卒業したこと、あの門をくぐらなくてもよいことが、どんなにせいせいしたか分かりません。学校のあらゆる軋みが卒業式のあの瞬間、津波のように僕を飲み込みました。イジメも悪口も優しさも正義も自分と無関係ではないことだと、はっきり自覚できたのです。紗江さんの炎のような抗議が僕の心の中の凍った泉を打ち砕いたのです。

第三章　天気雨

高校の合格を果たした僕の次の目標は大学進学でした。紗江さんと同じ大学に何としても入るんだと決めていました。だから、すぐに親しくなれなくても焦りはありませんでした。いつか紗江さんと肩を並べるんだと思い込んでいましたから。大学生になったつもりで、何度、紗江さんに語りかけたことでしょう。虚空に向かって、とっておきの台詞を。僕の心はぐんぐん広がっていくようでした。

ところで、にわか仕込みの勉強で入学は果たしたものの、授業にはついていくのがやっとのありさまでした。でも腐ったりはしませんでした。努力の成果は数ヶ月後に必ず顕れることを体

験的に知っていたからです。二年生になる頃には、ようやく中くらいに入ることができました。
体育祭や文化祭では少し大人びた紗江さんを真近に見ることが出来、それだけで満足していました。
高校生になって二度目の夏がやってきました。夏休みに入っても、紗江さんたち三年生は補習を受けるために毎日のように登校します。僕は陸上部に入ることにしました。グランドから紗江さんの教室を眺めよう、あわよくば姿を見つけることが出来るかもしれないと考えたのです。
陸上部は同好会に格下げになろうとする部で、部員は七人。背面跳びでぎっくり腰になった部員の補充として入部を認められたのです。
ところが夏休みの間中、紗江さんは学校に姿を見せませんでした。くつ箱には紗江さんのだけ上履きが置かれたままでした。新学期になっても紗江さんは登校してきません。紗江さんの上履きはうっすら埃を被ってしまいました。いてもたっても居られなくなった僕は、冷やかされるのを覚悟で陸上部の先輩に尋ねてみました。
『紗江？　ああ、あいつね。何だ、お前と同じ中学か。あいつ、担任とやりあって学校来なくなったんだ。どうでもいいことにミョーにガンバルから。それで、へたってりゃ世話ないね。あいつ、リスカやったって噂だよ』
呆然としている僕に先輩は続けて言いました。
『お前ねえ、どうでもいいけど、ハードルは跨ぐな。跳べ！』
そんな訳で陸上部にいる理由がなくなりました。
卒業式のあの日、中学生の紗江さんが息を呑むような抗議をしたこと。そのために彼女が深く傷つき、今もって孤立していることが痛々しくて悔しくてなりませんでした。
とうとう、高校の卒業式のその日まで紗江さんが学校に戻ることはありませんでした。引っ越したとも、入院したとも、家出したとも、うわさで聞きました。中には、リスカが成功したと酷い言葉を吐く奴もいました。僕は学校を憎みながら登校を続けていました。
三年生の夏休みになって補習が始まりました。一年前、グランドから見上げた教室に僕はいて、一向に身には入らない授業を漫然と受けていました。そんな僕を振り向いてくれる人はだれひとりいません。僕は受験から脱落したのです。
夏休みの最終日、ひとり教室を抜け出しました。ちっぽけな情けない抗議でした。校舎の裏には、星くずのような白い露草が流れる川のように群生し、足元には十字架の形をした純白の

ドクダミの花が咲いていました。天気雨が真っ青な空にキラキラと輝いて、悲しくて寂しくて透き通ってしまいそうでした。

第三章　咲かない桜

僕はすっかり意欲を無くしてしまいました。成績はダイブ状態、最下位に転落しました。母はオロオロし、父は落胆しました。

『どうせ、期待なんかしてなかったくせに』

家の中でそんな風に当り散らすしかなかったのです。勉強もせず、退学する勇気もなく、ただ惰性で通学していました。クラス全員が進学する中、自分だけ就職する気力もなくて、兎に角、入れてくれる大学に入りました。それでも両親は喜んでくれ高い入学金を工面してくれたのです。それなのに入学式に出たっきり、大学には一度も通いませんでした。学長の祝辞が気にくわなかったのです。

『満開の桜……門出を祝って……桜並木を……』

学長は桜、桜と重ねて言いました。けれど、その日、桜並木の坂道には、ひとひらの花びらもなく花曇りの空に灰色の梢が寒々としていたのです。

いくら、二部だからって、使い回しの祝辞を見直すこともしないのか……

腹立たしく、悔しく、

『先の見えた学校なんかごめんだ』

と啖呵を切り、父の説得にも母の涙にも心を動かされることはありませんでした。

僕の気持ちなんか誰にも分からない……頑なにそう思い込んでいました。自分の気持ちを話さないでおいて、むしろ隠そうとして分かってもらえるはずもないのに。腫れ物に触るように接する母がうとましく、説教臭い父の話はなお更聞きたくありませんでした。今にして思えば口下手な父が、僕の気持ちを理解しようと懸命になっていたのに。

僕はもう、人に会うのも話すのも嫌になっていました。体がどうしようもなくかったるく溶ける程眠り続け、かと思えば音や光に過剰に反応して一睡もできず、剥き出しの神経にあらゆるものが触れて辛くて辛くてたまりませんでした。

いつ果てるとも知れない苦痛からようやく脱したものの、昼夜逆転の生活になってしまい、

太陽を見ませんでした。体内のリズムが昼間は睡眠、夜は活動という風に変化してしまいました。活動といっても家の中だけです。台所でカップメンやレトルト食品等を食べ、パソコンをする日々です。母はインスタント食品や冷凍食品をほとんど使わない人でしたが、僕が引きこもってからは買い置きをするようになりました。と言うのも、母が作り置きしてくれた食事に僕が全く手をつけなかったせいです。

そんな生活のある日、無性にコーラが飲みたくなりました。いつの間にか、嗜好まで変わったようです。でも我が家の冷蔵庫にあるのは牛乳か野菜ジュースだけ、炭酸飲料の買い置きはありません。どうにも我慢できなくなって外に買いに行くことに決めました。気づかれないように部屋の窓から出ることにし、閉めっぱなしの雨戸を開けようとして、ぎょっとしました。小さな黒い生き物がびっしり張りついていたからです。コウモリです。悪戦苦闘して追い払ったと思ったら、大量の糞がザァーっとこぼれました。本当に気持ちが悪かったです。それを取り除いて、ようやく庭に下り立ちました。あたりは月の光が降り注いでいました。夜露に濡れた芝生が足の裏を突き上げます。外は生命に満ち溢れていました。

コーラを買いに夜の外出を果たした僕は、次第にコンビニや公園にも足を伸ばすようになりました。深夜の公園は愛犬家の社交場でした。ベンチにかけていると子犬が足元にじゃれついてきます。ふんわりした毛並みを撫ぜていると、なんだかほっとしました。ほとんどの人が犬を介して話しかけてくるので苦になりませんでした。

『お兄ちゃん、何歳ですかぁ？』

髪を高く結い上げた女性が、犬と一緒にしゃがんで声をかけてきます。

『二十五……』

ぽつりと答えます。

『お若いですねえ。で、アタシはもっと若いのよ、二歳でぇす』

と、犬に代わって言うのです。公園での会話はほとんどこうでした。

ある夜、いつものように午前0時に家を出、コーラを飲み飲み公園に向かっていると、シャッターの下りた商店街の通りで路上ライブに出会いました。同年代の男の人が看板の台に腰を下ろして、ギターを弾いていました。足を止める人はいませんでしたが、開いたギターケースには小銭が投げ込まれていました。遠巻きに佇んでいると、女の子のふたり連れが通りかかりました。濃いメイクをしているけれど幼い感じの子たちでした。中学生かもしれません。女の子たちはヒソヒソ話をしていましたが、はすに掛けたバックからパンを取り出すと、ギターケースに入れました。ギターを大きくかき鳴らして男の人は笑顔を向けました。女の子たちは互いの体をぶ

つつけ合い小さな笑い声を上げて、その場に座り込みました。まるで居場所を見つけたように。

何だか心がざわついていました。僕はいつものように公園には行かず、ただ、やみくもに歩き回りました。どのくらい経ったか分かりません。僕はひとつの決心をしていました。

家に帰るとすぐ押し入れを探しまくり、高校時代の美術の教科書やスケッチブック、色鉛筆を引っ張り出しました。そして公園で出会う犬たちの似顔絵を描き始めました。絵を描くことが特別に好きなわけでも、得意なわけでもなかったけれど、そのとき何故か、これなら僕にも出来ると確信したのです。実際、僕は犬たちの毛並みや特徴をよく記憶していました。

リッキー、コウメ、アヤヤ、コウタロウ、ラブ、マイケル……犬たちを思い浮べて次々に描きました。ようやく描き終えたときは昼を過ぎていたと思います。夜まで寝ようと思いましたが、すっかり覚醒してしまって、なかなか寝つけません。ヘッドホンでクラッシックを低く流して、とに角ベッドに横たわりました。ちょっとウトウトして目が覚めたのは、やはりいつもの時間でした。

スケッチブックと色鉛筆とCDケースを紙袋に入れて、いつものように窓から外に出ました。緊張で喉がカラカラでしたがコーラを買う気にもなれません。僕は行動を起こそうとしていました。

公園に着くと、いつものように顔なじみの人たちと犬たちが来ていました。ベンチに腰掛けた僕の足元に、早速、コウメがやって来て膝の紙袋を前足で引っかきました。カサカサと音がするたび、胸の鼓動が大きくなりました。

『コウメ、コウメ、だめ、だーめ』

コウメそっくりのチリチリの髪をした飼い主さんがコウメをたしなめました。僕は思い切って立ちあがり、スケッチブックを広げました。

『やだ、まあっ』

コウメの飼い主さんはスケッチブックを眺め、めくって、その中にコウメを見つけるとケタケタ笑い出しました。

『ねえー、ちょっと来てえ』

とみんなに向かって叫びました。みんなが寄って来て、代わる代わるスケッチブックを手に取り自分の愛犬を見つけて喜んでくれました。

『え、え、絵を買ってください』

震える声で言いました。そして、『一枚100えん』と描いたCDケースをベンチに置きました。

『安っ！』

『だめよ、安過ぎ』

『そうよぉ、うちの子の似顔絵がこんなに安くちゃいやよ』
みんなは口々に言いました。僕はもう嬉しくて胸がいっぱいでした。スケッチブックから愛犬の絵が一枚々外される度に、CDケースにお金が貯まっていきます。
７２００円。
僕が稼いだお金。ジーンズのポケットに手をつっこんでお金を握りしめました。指の間のコインがひんやりしたのを覚えています。帰りにコンビニに寄って好きな物を買おう。そう思ったけれど、たらこのお握り一個とお茶しか買えませんでした。
温めますか？の店員さんの問いかけに、
『そのままで』
と答えた自分がいました。
コンビニで声を発したのは何年振りだろう……
自分の力でお金を稼いだ。そのことが嬉しくてなりませんでした。こうして始まった似顔絵描きの真似事は口コミで少しずつお客さんが増えました。葉書き大からＡ４まで、値段も百円から千円までに設定しました。中には、亡くなった愛犬を描いて欲しいと写真を持参する人もいました。涙を流しながら愛犬の思い出を語るうち、少しだけすっきりしてもらえるようでした。似顔絵に花や虹や海を描き込むなどの希望を取り入れて、気に入ってもらえるよう一生懸命描きました。喜んでもらえることが励みになりました。口コミはさらに広がり収入は月平均四万円程になりました。僕の生活には充分過ぎる収入でした。いつのまにか貯金もできました。昼夜逆転の生活ながら安定していったのです。
でも、両親との溝は埋まらないまま会話を無くしていました。反抗的な気持ちは、もう消えていたのに習慣になってしまったのか、意地なのか、無言を通して歩み寄ることをしないままでいたのです。
不登校の『親の会』との出会いは、このような日々を送っていた頃のことです。

第４章　居場所

『親の会』の出会いから足掛け三年、『不登校新聞』の記者になってから半年が過ぎようとしています。地道に続けて来た活動は、それなりの成果をみ、繁華街の古いビルの一室を借りて

『子どもの居場所』が出来ました。そこには親の会のメンバーが常駐しており、僕も周に三回程、通っています。ここに来る子は男の子ばかり四人。小学三年生ひとりと、あとはみな六年生です。誰も来ない日もあれば、四人が勢ぞろいする日もあり、それぞれパソコンをしたり漫画を読んだり好きなことをして過ごします。

『親の会』の事務所兼僕の住まいからは自転車で十分とかかりません。裏道から裏道を走り、モルタルアパートやコンテナの店が入り組んだ狭苦しい路地に入り込むと、『子どもの居場所』があるビルの裏側に出ます。錆びたホーロー看板が目を引く、空き家の板塀に自転車を立てかけ、ビルの外階段を駆け上がっていると、

「クニハルさん、おはよう」

と、下から亨くんの声がしました。

「おはよう。いつもこっちから来るの？　遠回りだろ」

亨くんはバスを利用しています。ビルの表は華やかな大通りに面していて、バス停もすぐ近くにあるのです。

「だって……」

亨くんは部屋に入るとすぐにブラインドを上げ、賑わう通りを見下ろして言いました。

「表を歩くと、学校は？って聞いてくる人がいる。補導員かも……」

そうか……僕は口の中で答えて冷蔵庫からコーラを取り出しました。

「僕も」

亨くんが嬉しそうにコップを差し出しました。亨くんは中毒みたいにコーラが好きです。僕はコーラを注いでやりながら話しました。

「外国には日常生活が即、単位になる通信制の高校があるんだって。例えば、亨くんがここに来たことが単位になるんだ。出席扱いになるってことだね」

「へえ、いいな……でも、どこにも行かないで家の中だけだったら？　どうなるの？」

「家にいてテレビを観ていたことでもいいんだ。もちろん、どんな内容の番組かってことはレポートで提出するんだけどね」

「……ふうん」

亨くんは、きまり悪そうに僕をチラ見してコーラを注ぎ足しました。

「遠慮するな、飲めよ」

亨くんは盛上るほど注いで、水溜りの水を飲む鹿のように顔を近づけました。それから一息に飲み干すと、コップの底を見つめて言いました

「でも、それって、自分のしたいことだけしかしないってことでしょ？」
怠け者になるのではないかと、気にしているのだと思いました。僕は別の意味を込めて答えました。
「自分のしたいことって、なんなのか、なかなかわかんないよね」
「うん。わかんない」
即座にうなずいて亨くんは言いました。
「でも、どうしてわかんないんだろう。自分のことなのに」
「学校って勉強のことが中心だから……やりたいことを見つける場所じゃなかったなあ、僕の場合は」
亨くんはふうんと言ったきりぼんやり窓の外を見ていました。
「僕は行ってない……だけど、やりたいことがわかんない」
「やりたくないことは？」
「勉強……」
亨くんはペットボトルを振り回しながら言いました。
「僕、来年中学だけど……でも行けそうもない……」
僕は亨くんの手からペットボトルを取り上げ強く振り、ふたを外して握り締めました。泡が不思議な生き物のようにニョロニョロ這い出します。僕たちはおかしくなって吹き出しました。僕たちは、代わる代わる、このくだらない遊びを繰り返してはゲラゲラ笑いました。
「中学に行けなくたって構わないと思うよ。ここに来ればいい」
「ここが学校だったらいいのに」
「本当はここだって学校なんだけどな……」
亨くんの茶色い瞳が、語り続ける僕を逸れて肩越しに壁を見つめています。
「早い話、学校って教室の集まりだろう？　その教室のひとつがここでもいいと思うんだ」
「待って、頭をからっぽにする」
亨くんは話を遮りパソコンに向かってしまいました。僕は小さな後悔を振り払い、ドアを開け放ち踊り場の高窓をモップの柄で開けました。隣りの空き家から伸びた蔦が、そこいらの植物や塀や外階段の手摺りに絡まって、高窓から侵入しようとする勢いです。暫らくすると風が通り抜けていきました。
僕はパキラの鉢植えで仕切られた応接コーナーのソファーにどっかり腰を据え、「不登校新聞」の読者から送られてきた投稿文を鞄から取り出しました。先月号に掲載したシリーズ『自宅

学習を出席扱いにする制度』についての反響です。
出席日数の不足が妨げとなって高校への推薦を受けられない、イジメで学校に行けないのに、二重に不利益をこうむっている。この制度を利用したいと思っても教育現場で周知されていない。こんな制度があるなんて知らなかった、詳しく教えてほしい……等々
この制度についてのアンケートを行っている『親の会』のメンバーが、来月号の記事を引き受けてくれ、ここで打ち合わせをすることになっているのです。
「……クニハルさんってばぁ」
亨くんの気だるい声に気付いて、僕は釘づけになっていた原稿から引き剥がすようにして顔を上げました。
「ペットショップでもいいの？」
唐突に亨くんが尋ねました。彼はしばしば、こんな風にいきなり言い出します。僕は過去の会話を忙しく呼び起こさねばなりません。……中学……ここも学校……教室のひとつ……
「もちろんだよ。ペットショップも亨くんの教室さ」
会話をつなぐ箇所を探し当てたというのに、亨くんは答える代わりに吹きだしました。
「なんだよ、なに笑ってんだよ、教えろよ」
さすがにムッとして問い詰めると、
「いいよ、くだらないし……」
そう言って、また笑います。
「くだらないのは分かってる。いいから、教えろ」
「分かったよ、うるさいなあ……クニハルさんが、学校だ教室だってうざいことばっか言うから、学校をカッコって言ってみただけだよ。『こちら、小カッコの先生です』『カッコのきまりを守りましょう』とか、おかしいじゃん。『大カツ教授』か……ふぅ、腰がくだけそう」
「ほんっと、おまえはくだらないこと思いつくよ。聞かなきゃよかった」
カッカして、つい声が大きくなりました。
「僕ね、カクレクマノミが好きなんだ」
又、話しが飛ぶ……
彼のイメージを追って僕の脳はフル回転しています。
「カクレ……」
「クマノミ。オレンジと白の縞々のやつ。かわいいんだ」
「んーと……熱帯魚だ」

「僕ね、水草も好きなんだ。アナカリスにアンブリア。あっちがスクリューバリス。ゆらゆら動いてるのを見ていると、水草の中を歩いてる気がするよ……」
亨くんはパソコンの画面をじっと見つめています。
……ここ光の林だよ……風は水の中にも吹くらしい……額が冷たい……
亨くんのイマジネーションがいっぱいに膨らみ、僕らはたちまち水槽の中……
「おーい、もどってこおい……」
耳元でささやく声で我に返ると、いつのまに入って来たのかタネさんが立っていました。
「なんだ、脅かさないでよ」
「そうだよ、森林浴してたのに」
「まぁた、ふたりでモーソーしてる」
「空想って言ってくださいっ」
タネさんは知らん顔で、
「コーラはやめて、お茶にしなさいよ、お茶に」
と言いながら持って来たペットボトルのお茶を冷蔵庫に入れ、亨くんはまた、ゲームを始めました。
「一木さんが、来月号の記事を引き受けてくれたんだって？」
ソファーに腰を下ろしてタネさんが言いました。
「そうなんです。例の『自宅学習を出席扱いにする制度』についてなんですけど」
僕は読んでいた投稿の束を差し出しました。タネさんは、ふん、ふんと頷きながら目を通しています。
「あてがわれた自宅学習はいらないって……これ、いいんじゃない？」
タネさんは投稿の一枚を僕に示して言いました。
「僕もそう思います。はっきり主張してますよね」
「……へえ、十六歳か、しっかりしてる」
「ひとり々の実状に合わせる必要があるって書いてます」
タネさんは大きく頷きました。
「親がこの子を受けとめてるのね、きっと」
含み笑いを洩らしてタネさんは続けました。
「登校しないで出席扱いだなんて、ズルイって言う人がいるけど、不登校って、けっこう力がいるよね。ズルイのレベルじゃないっうの」

「ズルイって言う奴、学校が嫌いなんじゃないかなあ。オレは嫌でも頑張って行ってるのに、オマエはなんで行かなくてすむわけ？　しかも、なんで出席扱い？ってね。
けど、遠足とかの時は、休んだって誰も何にも言わない。他の奴が出席だろうが欠席だろうが関係ない。自分が楽しむのに夢中なんだから。そんなもんだ」
「そう、そう、わたしが小学生の頃は学校を休むと、『山学校』なんて言われた。遠足はもう何がなんでも行くわねえ」
「……山？　山って……？」
「学校休んだら、山に行って遊ぶしかないのよ、私たちの時代は。言っとくけど、キャンプじゃないのよ」
「食料がなくて、狩してたとか？」
しれっと言うと、タネさんは、ちょっとお！と、思いっきり頬を膨らませました。
「タネさん、今おもしろい顔してますよ。ずっとその顔にしといて」
タネさんの反応がおもしろくて、つい調子づいてしまう。それにタネさんがのってくれるのも、生真面目に考え過ぎる僕の性格を見越してのことだと知っています。
「ふん、あんたにはコーラ飴やんない。いい子の亨くんにだけあげる」
パソコンに熱中していたはずの亨くんが、さっと手のひらを差し出しました。飴が口に入っている間だけ僕たちは静かです。
「ねえタネさん。さっきは亨くんに『自宅学習を出席扱いにする制度』について話そうとしてたところなんですけど……」
僕は亨くんを意識しながら切り出しました。
「どういう風にこの制度を利用したらいいのか、わたしもまだ分からないけど……言えることは、今の生活を崩さないでいいってこと」
「そうですよね、その子の学びの場は、その子が見つけていいんですよね」
そう……とつぶやいて、タネさんは親指の爪を噛みました。考え込む時の彼女の癖です。
「認めてもらえるように働きかけるわ」
「認めてもらう？　へりくだる必要はないと思うけど」
「高みに立つ必要もないのよ。相手がだれであろうと話し会う態度は必要よ」
「そうかなあ……制度をよく把握して要求していけばいいんじゃないですか？　知識を持っている者の勝ちだと思うけど」
「もちろん知識は必要。有利に運ぶためにもね。でも、制度は入れ物に過ぎない。動かすのは

人よ。理解してもらう手間を惜しんではいけないわ」
気のない返事を返したけれどタネさんの言葉は胸に染みました。彼女は、いつも思い込みを気付かせてくれる、膨らみをもたせてくれる……いい記事が書けそうな気がしました。
「そうそう、今日、一木さんがみえるんでしょ」
「ええ、もうそろそろ」
「きのう、彼女に会ったんだけど、学習ボランティアの人がみつかったんですって。聞いてる？」
「いえ、まだ。で、いつから来てもらえるんですか？」
「それはまだ……。教員免許を持ってるらしいの。子どもが好きな人ですってよ」
会話が弾んでいるところに固定電話が鳴って、ほら、一木さんよ、とタネさんが言いました。電話を取ると一木さんです。
『……会わせたい人がいるの……そう、ボランティアの……』
一木さんの甲高い弾んだ声と一緒に、クラァン、カラァンと外階段を駆け上がる足音が聞こえます。
「来たみたい」
受話器を耳に当てたまま、タネさんに言いました。
「ちわっ」
満面の笑顔で飛び込んで来てた一木さんは、体を逸らし、ドアに向かって呼びかけました。
「どうぞ、遠慮しないで」
ドアの陰に隠れていたその人は、イナイイナイバーをするように首を傾げて顔を覗かせました。その途端、僕は光の棒で殴られたような激しい衝撃を受けました。
「……入って……」
一木さんの声が遠くで聞こえ、心臓がドックン、ドックンとばかでかい音を立てて、体が揺れてしまう。驚きの余り息をするのを忘れた僕は、プールの底から這い上がったみたいに、ものすごく格好悪いため息をついてしまいました。
「はじめまして。斉道紗江と申します」
はにかんだ笑顔が真っ直ぐに僕に向かいました。

完